

スプレー系ストックにおける遮光による開花調節

1 情報・成果の内容

(1) 背景・目的

ストックの有利販売につなげるため、現場から精度の高い開花調節技術が求められている。これまでの試験結果より、スタンダード系品種の8月初旬播種作型においては、発蕾後の短期間強遮光^{注)}による開花抑制が可能であり、有色品種においても利用可能な手法であることが明らかとなっている。しかし、スプレー系品種の遮光による開花抑制効果および効果的な遮光方法については不明な点が多い。そこで、スプレー系品種において開花抑制に効果的な遮光時期および期間、開花時期や切り花品質への影響について検討を行った。

^{注)} 強遮光：50%寒冷紗による3重遮光

(2) 情報・成果の要約

- 1) 発蕾後1か月程度の50%遮光により1週間開花を遅延できる。摘芯後からの遮光ではこの効果は認められない。
- 2) 発蕾後1か月間の遮光では有色品種‘カルテットパープル’における花卉の着色不良はみられなかった。

2 試験成果の概要

- (1) 品種は‘カルテットホワイト’と‘カルテットパープル’を供試した。播種は2025年8月19日に行った。
- (2) 遮光処理については表1に示した。遮光は50%寒冷紗1重とした。
- (3) 遮光処理期間中の日中平均照度は、遮光を行った区で無処理区の5～6割程度であった(表2)。
- (4) 花芽分化日は‘カルテットホワイト’が10月3日、‘カルテットパープル’が10月5日だった。
- (5) 平均採花日について、両品種ともに無処理区と比べて発蕾後遮光区で7日遅かった。‘カルテットホワイト’の無処理区と摘芯後遮光区との差は1日のみであったが(表3)、発蕾後および摘芯後遮光区は無処理区よりも開花のピークが遅かった(図1)。
- (6) 両品種とも無処理区と比べて発蕾後遮光区で切り花長がやや長く、葉色が淡い傾向だったが、切り花品質に大きな差はみられなかった。切り花長は全体的に短く、圃場が乾燥していたためではないかと考えられた(表3)。
- (7) 有色品種‘カルテットパープル’において、発蕾後の遮光による花卉の着色不良はみられなかった(データ省略)。

表1 試験区の設定

注) 寒冷紗：ふあふあエース 50 (ダイヤテックス(株))

表 2 遮光期間中の日中平均照度

処理区	日中平均照度(klx)	
	10/28～11/26	11/21～12/18
無処理	17.0	13.1
発蕾後遮光	8.8(52%)	—
摘芯後遮光	—	8.0(61%)

注) 照度測定: Illuminance UV Recorder TR-74Ui を使用

日中平均照度: 6 時～18 時までの平均

—: 当該期間中の遮光処理区ではないため省略

()内は対無処理比

表 3 各遮光処理が平均採花日と切り花品質に及ぼす影響

品種	処理区	平均採花日 (月/日)	切り花重 (g)	切り花長 (cm)	第1分枝長 (cm)	茎径 (mm)	葉色 (SPAD値)	分枝数	着色 花蕾数	節数
ホワイト カルテット	無処理区	12/19	136	55	20.1	9.1	53.9	5.7	27	46
	発蕾後遮光区	12/26	125	58	20.7	9.0	51.0	5.1	26	46
	摘芯後遮光区	12/20	137	56	19.6	9.1	54.4	5.8	27	45
パープル カルテット	無処理区	12/25	170	67	23.1	9.3	55.3	5.6	30	51
	発蕾後遮光区	1/1	165	69	23.5	9.2	52.5	5.5	27	52

注) 茎径: 地際から 10cm の部分を測定

葉色: MINOLTA 社製葉緑素計 SPAD-502 で測定

着色花蕾数: 第 6 分枝までの着色花蕾を数えた

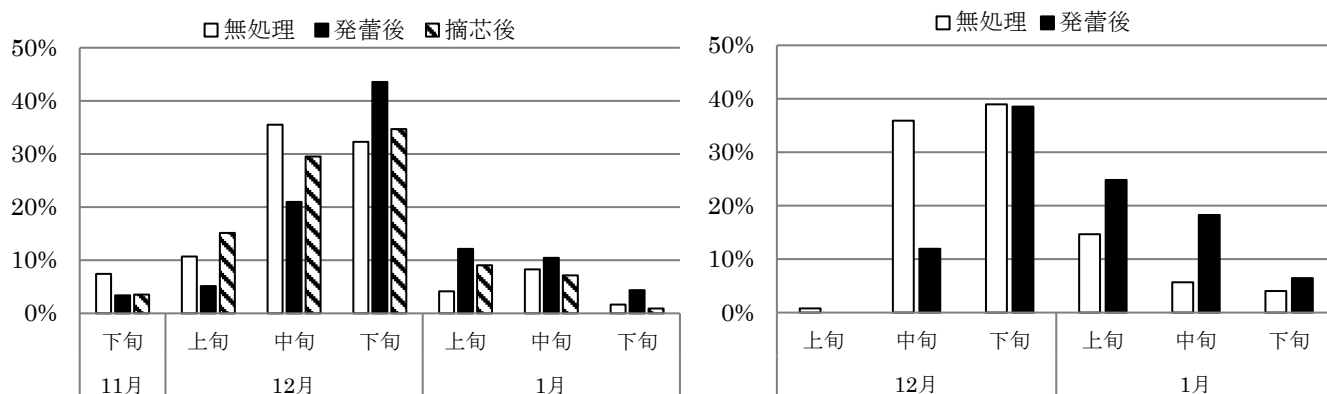


図 1 時期ごとの採花率の推移 左: ‘カルテットホワイト’ 右: ‘カルテットパープル’

※採花率: 当該期間中の採花本数/全体の採花本数

3 利用上の留意点

遮光による開花抑制効果は年次変動が大きいため、遮光を行う際には気象条件に注意する。

4 試験担当者

〔	花き研究室	研究員	神庭涼子
		研究員	松崎弘佑
		室 長	遠藤 英